

知られざる
三重にまつわる
文学・美術を
紹介します。



葉全集、緑雨書簡他 三重県立図書館蔵
左下の封筒は、幸徳秋水(伝次郎)宛。緑雨は晩年、彼と毎日書簡を送り合うほどの親密な交際をおこなっていた。

CHRONICLE OF MIE VOL. 1 【文学編】

尾西 康充 おにし やすみつ
人文学部・文化学科教授
専門は日本近代文学
1967年生まれ

明治文壇の鬼才、斎藤緑雨。

明治の文壇にあって痛烈な批評と、優れたアフォリズム(警句)で知られた評論家・小説家の斎藤緑雨。三重県生まれの鬼才が放つ言葉には、社会の現実に向き合い続けた冷徹なアフォリズムが宿っている。

新

しい文芸理論の輸入によって氣勢をあげていた明治作家たちに、斎藤緑雨は「鴉外、逍遙、露伴、この三つの名前を除きては、只見る犬張子、仲見世の売品たるに過ぎず」と冷や水を浴びせた。体裁だけが立派で中味に乏しい作品は、理論に従って巧みに創作されているが、実生活の体験に裏打ちされていないために一般読者を説得するリアリティに欠けているという。歯に衣着せぬこの批評は「嘲罵の毒筆」と恐れられ、作家仲間から遠ざけられてしまうことになった。だが、そこには2人の弟のために学業を断念せざるをえず、社会の裡面で人一倍辛酸を嘗めてきた緑雨の矜持が存していた。このように屈折した心情は、同じ没落士族という家庭環境に育った樋口一葉に通じるものがあり、彼女は死の床で、それまで自分が心血そそいで執筆してきた原稿の整理を緑雨に託して逝った。

王政復古の号令が発せられた慶応3年(1867)に、緑雨は伊勢神戸本多藩医の長男として生まれた。緑雨と同じ年に生まれたのは夏目漱石や宮武外骨、南方熊楠、幸田露伴、正岡子規、尾崎紅葉たちで、大変動する時代の血を受けた革命児ばかりである。維新後、

秩禄処分によって武士たちは急速に没落し、緑雨の家族も故郷で生計を維持することはできなくなっていた。一家をあげて上京した明治9年(1876)に三重県内では、新政府を震撼させることになった伊勢暴動が発生した。地租改正によ



斎藤 緑雨 さいとうりよくう

本名・斎藤賢(まさる) / 評論家、小説家、随筆家
1867年~1904年

三重県鈴鹿市に生まれる。仮名垣魯文に師事し、明治19年(1886)に最初の小説を発表。その後「小説八宗」で批評家として脚光を浴び、花柳小説「油地獄」「かくれんぼ」で小説家としての地位も確立。別号に正直正太夫、江東みどり、登仙坊など。森鴉外、幸田露伴らとの文壇時評「三人冗語」は当時の最も権威ある批評欄とされたが生活は貧窮し、肺結核のために明治37年没。その際、自身の死亡広告を出した。享年36。

て税負担が増加していたことに不満を募らせていた農民の抗議行動が(志摩牟婁を除く)県内全域に拡大し、愛知・岐阜両県にも飛び火した。新政府は西南戦争をはじめとする士族の反乱が発生するのは想定できていたが、農民の大規模な反乱はまったく予想外のごとで、新政府発足以後の最大の危機と考えた。彼らを鎮圧するために警視庁には警官の派遣が要請され、名古屋・大阪鎮台には軍隊の出動が要請された。警官や軍人の多くは士族たちで、新政府から冷遇されていた彼らは本来農民たちの味方としてもよかったはずなのだが、武士は農民を蔑視するという旧幕時代以来の封建的な考え方のために、暴力をもって農民たちを過酷に弾圧した。

緑雨のアフォリズム(警句)の一つに、「剣を以てするも、筆を以てするも、強者は遂に弱者を扶くることなし。弱者を扶くるは弱者なり、どの道のがれぬ弱者なり。同病相憐むに過ぎず」(「眼前口頭」という作品がある。「どの道のがれぬ弱者」だけが「弱者」を助けるという冷徹なりアリズムの眼は、伊勢暴動が発生した三重県出身の緑雨独特のものであった。



『校訂一葉全集』博文館刊。一葉没後、緑雨によって校訂刊行された最初の一葉全集。序文は緑雨。「にぎりえ」から「たけくらべ」にいたる24編を取める。(三重県立図書館蔵)



三重県鈴鹿市神戸2丁目にあった斎藤緑雨の育った家。すでに取り壊されたが現存していない。



龍光寺(三重県鈴鹿市神部)境内にあるNPO法人SUZUKA文化塾 吟味庵では、緑雨の生家の一部を復元し一般に公開している。(龍光寺提供)



文学碑「抜ずるに筆は一本也。著は二本也。衆寡敵せずと知るべし。」優れた作品を執筆しても、食いはぐれては仕方ないが、それでも自分は筆をふるい続けるという意味。(龍光寺提供)